

# 複数のケアの受け手と与え手を包括する

## 「感覚的活動」概念の構築

——母親が家族の食事を用意・調理するケアに着目して——

江島 ゆう花

本稿の目的は、ケアの認知的な側面に関する研究群のうち、ジェニファー・メイソンの「感覚的活動」概念に着目し、同概念を日本社会において母親という女性ケアラーが家族の食事を用意・調理するケアの分析枠組とする利点と課題を、諸概念との比較を通じて整理することである。感覚的活動とはケアについて感知し思考する活動を指す。本稿は、同概念の特徴をアクターが交わすケア行為の個別性や関係性に着目する点、同概念の利点をケアの分担の困難とされてきたケア関係ごとの差異を感覚的活動の特質としてとらえ直す点にみる。同概念の課題としては、感覚的活動を行う多様なアクターの範囲と関わり方を探知することとし、感覚的活動を行うアクターを、家族・親族内の女性ケアラーや能動的なアクター、そして与え手と受け手とのダイアド関係に閉じることなく検証する必要性を確認する。

### 1 問題の所在

#### 1-1 感覚的活動の女性ケアラーへの偏重

近年のケア研究が明らかにしたのは、他者を支える「ケア」には、ケアの与え手による目に見える物理的ケア作業だけでなく、配慮・感知・思索といった認知レベルの活動があり、この活動こそが物理的ケア作業をケアとして機能させていることである。そして注目すべきは、認知レベルの活動は責任や遂行が女性ケアラーに偏っており、この偏りは物理的ケア作業の夫婦間あるいは社会的公平の動きに呼応するようには変容しないことである。

本稿はこうした研究群のうち、ジェニファー・メイソンの「感覚的活動」概念に着目する(Mason 1996)。感覚的活動とは、ケアについて感知し思考する活動で、物質的・文化的・社会的制約や、ケアに関わるアクターの個別性や関係性のもとで生成・編成される活動である。本稿はこの感覚的活動が、ケアに関わるアクター、ケアニーズ、そしてアクターたちの相互行為をどのようにとらえる概念か整理する。整理するにあたっては、感覚的活動を類似する諸概念と比較する方法をとる。また、感覚的活動が交わされる家事労働の一例として、日本社会において母親という女性ケアラーが家族の食事を用意・調理するケア労働に着目し、感覚的活動を分析枠組に用いる利点と課題に留意する。

日本の母親が家族の食事を用意・調理するケア労働に着目する理由は、このケアは物理的ケア作業と感覚的活動双方の負担が他のケア労働に比べ格段に大きい、その多大な負担を女性ケアラーが担っているとされるからである。このようなあり方やその規定要因を認知レベルのケア活動から精査する研究は、始まったばかりである。本稿は感覚的活動という概念そのものを検証し、この概念が女性ケアラー以外のアクターの感覚的活動への関与を許容する概念であることを論じ、そのような視座に立った経験研究の必要性を主張する。

## 1-2 家族の食事を用意・調理する長時間ワンオペケア

本論に入る前に、日本の女性ケアラーが抱える家族の食へのケアを概観する。女性ケアラーの家事総時間は短縮傾向にあるが（平尾 2021）、家族の食事を用意・調理するケアに限っては、平成期は一貫して日に 2 時間程度と横ばいだったのが（総務省統計局 2018）、2020 年以降はコロナ禍の自炊傾向で増長傾向にある（東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター 2020）。また、近年は朝晩共に食事をする家族は 2 割以下といわれるまで孤食が一般化し（品田 2017）、子育て家庭の 3 割が食物アレルギー患者を抱え（一般社団法人日本小児アレルギー学会 2016）、ケアの機会や配慮すべき対象も増えている。結果として、家族の食事を用意・調理するケアは家事総時間の半分を割く、掃除や洗濯といった様々な家事労働の中で格段に時間を要すケアとなっている（NHK 放送文化研究所 2011）。

またケアの担い手に着目する研究は、日本の女性ケアラーは家族の食事を用意・調理するワンオペケアラーであることを示す。家族の食事を用意・調理するケアの主たる担い手は、どの社会においても女性ケアラーであるが（Jenkins and Gerstel 2020）、日本はその極端な例である。ISSP の調査を分析した牛窪恵によれば、家族のいる日本人女性の「食事のしたく（調理）」の負担率は 91 %、調査国 50 ヶ国のうち最高のワンオペ率である（ISSP 2014; 牛窪 2019: 2）。

日本の女性がワンオペケアラーとなる一因には、家庭内外の代行者の不在・不利用が指摘できる。ISSP の調査のとおり男性の「食事のしたく（調理）」負担率は微力であるが、だからといって家庭外のケアワーカーによる家事代行サービスの利用へは抵抗感が根強く（野村 2016）、食事の用意・調理は商品化が難しいケアサービスとされ改良がみられず（久保 2017）、結果として利用は進んでいない（多賀 2021）。ケアの市場化の進む諸外国においては、ケアの分業はジェンダー、階級、エスニシティをも変数とし再編され、食卓、食器、台所の片付け、温め作業などは「専門性の低い」労働とされ、広い階層においてエスニック・マイノリティの女性の移民ケアワーカーの労働として普及し（Tayah and ILO 2016）、家庭が負担する物理的ケア作業は低減している。また、近年は外食や出前、市販の総菜といった調理済み食品の利用は伸びているが（永井 2016）、これらの利用が物理的ケア作業時間の短縮や、ケアの「負担」の軽減につながっていることを示す計量研究はない（平尾 2021: 42）。日本の女性ケアラーが抱える食事の用意・調理というケアは、ケアの総量も担い手も固定的なままである。

日本社会における食に関する言説に目を転ずると、女性ケアラーが母親として食に手をかけることを助長する言説が、子どもの成長段階に応じて確認できる。『母子健康手帳副読本』によると、女性は妊娠中から胎児の発育のために 1 日 3 食「1 汁 3 菜」「いろいろな食品をさまざまな調理法で」食べることが大切とされる（公益社団法人母子衛生研究会 2021: 26-7）。産後は「よい母乳」を出す食事（公益社団法人母子衛生研究会 2021: 72-3）、離乳食は調味料に頼らない素材のうまみを生かした食事（公益社団法人母子衛生研究会 2021: 130）、幼稚園児や中高生には手作り弁当が求められる（Allison 1991）。その他にも「早寝早起き朝ごはん」言説や、規則正しい食習慣が成績を伸ばし将来の生活習慣病を予防するとの言説等、物理的ケア作業と感覚的活動の双方で母親による手厚いケアを求める言説が多々存在する。これら

の言説の影響もあってか、母親は自身が食事の用意・調理をワンオペケアする理由を母役割に求める傾向が確認されている（藤田・額賀 2021: 73-4）。このような意義づけは、欧米の母親のように、時間資源、食への要求水準、家事スキルの高さといった個人の資源や資質で意義づける状況に比べ（Beagan et al. 2008）、母親でない者の食への関わりを難しくしているともいえる。本稿は、母親に閉じたケア負担を感覚的活動の概念枠組から解く。

### 1-3 本稿の構成と「ケア」の定義

本稿は以下のような構成を取る。第2章ではメイソンの「感覚的活動」概念を概観し、この概念がケアの個別性や関係性を主張する特徴を示す。第3章では、感覚的活動と「感情労働」「名もなき家事」「家事のマネジメント」「心的労働」「認識労働」概念を比較し、母親が家族の食事を用意・調理するケアを調査研究する上での感覚的活動概念の利点と課題を整理する。第4章は本稿を総括し、感覚的活動の概念枠組のもとで多様なアクターを受け手/与え手に分節化することなく経験研究する必要性とそこでの視座を記す。

本章の最後に、本稿で用いるケア概念をケア研究の系譜に照らし定義する。まず、本稿はケアを論じる場を、母親ケアラーと同居家族成員間の相互行為に限定する<sup>1</sup>。そのうえでケアを「各家族成員の生活・生存を支えるために、各家族成員の身体的かつ情緒的なニーズに対し、それが担われ遂行される言説と資源配分構造のもとにおいて、充足する行為と関係」と定義する。

「家族成員」とは、ケアラーが自身に依存的な存在とみなす成人や子どもだけでなく、健康な夫や若年層の子のように、依存的かどうかにかかわらずケアラーがケアの対象とみなす成人や子どもを含む。本稿同様ケアの受け手を依存度で措定しないケア研究としては、女性ケアラーが、両親や義両親、成人の子、親族や友人をもケアの受け手とし複数のケア関係に関わり、食事の用意や子どもの世話をはじめとするケアを提供していることを示したナオミ・ガーステルとサリー・K・ギャラガーの研究がある（Gerstel and Gallagher 2001: 204-7）。また受け手を依存度で規定する定義の限界としては、「自分で動ける成人も、ケアを必要としている」ことを概念化できないことや、「依存的」の客観的な判断が難しいこと（Folber 2001: 176）、「依存的」か否かの境界は、政治的、規範的、個別のケアの関係に依存して流動的に規定されることも指摘されている（上野 2011: 42）<sup>2</sup>。本稿も同様の見解を取り、母親が行う家族の食へのケアは、依存的な家族成員を含めた複数のケアの受け手に提供されるケアであり、親子ダイアドに閉じたケア関係として論じられないケアとみなす<sup>3</sup>。

「ニーズ」あるいはケアニーズとは、ケアの与え手が受け手に想定する要求・必要であり、ケアの与え手の行為の目標に据えるものとする。稲葉昭英によれば、ニーズには、本稿が依拠するような与え手の想定する外挿的ニーズ、受け手が期待する主体的ニーズ、社会が受け手に設定する社会的ニーズがあり、ニーズは与え手に行為の目標と解釈される場合と、行為の結果としての充足状態と解釈される場合がある（稲葉 2013: 229-30）。本稿の着眼は、母親というケアの与え手が物理的ケア作業を目標とした際の思考にあるため、稲葉のいう外挿的ニーズに照準を絞る。

「生活・生存を支えるために」とは、「ケアの受け手のためになる」というケアの志向性を

含意する。この志向性は「その人（ケアの受け手）が成長すること、自己実現することをたすけること」とのミルトン・メイヤーロフの定義を例に（Mayeroff 1971）、ケアと他の行為とを分かち重要な相違点とされてきた（稲葉 2013: 228）。ケアの志向性を指定するのはケアの行為者の価値自由を奪うとの批判もあるが（上野 2013）、ケアを食事の用意・調理に限定する場合、ケアに食べ手の生命の維持、存続のためとの価値を指定したとしても、ケアに他の価値を不随する余地は残される。

本稿は、ケアに関わる主体を「アクター（行為者）」と呼び、家庭というインフォーマルな場におけるケアの与え手を「ケアラー」、家庭外からのケアの与え手を「ケアワーカー」と呼ぶ。また、アクターをとりまく構造としては、山根純佳の「言説と資源配分構造」を援用する（山根 2010: 9-32）。山根は女性ケアラーが依存的な存在へのケア労働と、健康な夫等への「周辺的な労働」という複数のケア関係に繋がっていることを前提に、この構造を前者のケア労働にのみ適用したが（山根 2010: 34）、この構造は後者の労働の構造としても機能すると判断する。

最後に、本稿は「ケア」を「行為と関係」ととらえる。この視点により、母親のケアは、母親がアクターと行為を交わすことで成り立つものと捉えることが可能となる。「行為」とは、ケアラーによる目に見える行為である「物理的ケア作業」と、ケアラーの思考や認知レベルの目に見えない行為である「感覚的活動」から成り、以降で詳述するとおり、物理的ケア作業は感覚的活動がなされることでケアする行為として成り立っている。「関係」とはアクターたちによる相互行為を指す。なお、以下で詳述する「感覚的活動」の特徴である「関係性」とは、ケアニーズの満たし方や、受け止め方のパターンを指し、「関係」とは区別する。

## 2 メイソンの「感覚的活動」の射程

### 2-1 感覚的活動とは何か

「感覚的活動」とは、1990年代半ばにイギリスの社会学者のジェニファー・メイソンが提唱した *sentiment activity* という概念を、日本の社会学者の平山亮が日本語に訳したものである（平山 2017）。メイソンによれば、「感覚的活動」とは、目に見える物理的作業としての「ケア」を成り立たせるために、ケアの与え手が、ケアの受け手のケアに関わる対象を「感知すること（*feeling*）」と「思考すること（*thinking*）」である（Mason 1996: 27）。

メイソンが家族や親族をケアする際の感覚的活動の具体例とする記述を紹介する。まず、ケアの与え手が感覚的活動を行う対象は、特定のケアの受け手たち（*specific others*）の即時的なケアニーズだけではなく、受け手たちがどのような健康状態で、どのような幸せを望み（*wellbeing*）、どのような人物で（*behaviors*）、何を好み、どのような気質、個性、性格であり、どのような社会関係を持っているかといった、いわばケアする手がかりとなりうるケアの受け手のその人らしさやネットワークもが含まれる。そしてケアの与え手が「感知すること」とは、これらの対象について、注意を払う、気づく、聴く、同調する、観察する、組み立てる（*constructing*）、解釈する、学ぶ（*studying*）、関心を持つことである。また「思考すること」とは、ケアについて熟考し、解決し、組織・調整し（*organizing*）、計画し、統合するこ

と (orchestrating) とされる。そして、ケアの与え手が感覚的活動を行う際に考慮すべき関係は、複数のアクターたちとの一体他者関係 (relationships between oneself and others) と、ケアの与え手自身を除く複数のアクターたちの関係 (relationships between others) とする。

## 2-2 感覚的活動の前座としてのケア概念の確認

「感覚的活動」を含むケアの認知や思考面に着目する研究は、1980年代に興隆したフェミニズムのケア研究におけるケア概念を批判的に検証して生まれた概念である。本項では、その系譜を確認する。

フェミニズムのケア研究に「ケア」概念を持ち込んだのは、ヒラリー・グラハムである。グラハムは、女性ケアラーにとってのケアとは、家族や周囲の他者への愛や配慮や自己アイデンティティの獲得といった感情的な経験であると同時に、愛や配慮が終わっても続けなければならない物質的労働や負担であるとし、ケアをその二面性から定義した (Graham 1983)。またクレア・アンガーソンは、ケアを「配慮 (caring about)」と「世話 (caring for)」から成る行為とし、配慮はケアラーの自発的な愛情から生じ、時間は必要としない行為、世話はケアへの義務感や規範から生じ、時間を消費する労働とした (Ungerson 1983; 31-2)。またアンガーソンは、女性ケアラーが世話に携わる要因を言説構造と物質的条件に求めた。感情面の存在をケアの特徴とする見方は、第3章1節で言及する「感情労働」概念を生んだ。そしてメイソンは、「配慮」を労働に対峙する感情としてではなく、ケアの与え手の思考に見出そうとした点で、ケア概念の系譜を批判的に継承した。

また、労働と感情の二分法ではとらえきれないケアの営為については、キャロル・ギリガンに始まる「ケアの倫理 (ethics of care)」が概念化を試みた。(Gilligan 1982)。ギリガンは、正義や権利の道徳論が前提とする他者の利益と切り離された自己 (依存的他者を抱えない自己) を男性中心性と批判し、女性ケアラーのケアを、他者への責任、他者のニーズ、他者との固有のケア関係を配慮しながら道徳的判断を行う過程と理論化した。ギリガンの理論には多くの批判がある (山根 2010: 131-9)。メイソンも同理論は女性に道徳的判断を措定し、個々の女性ケアラーが築くケア関係の個別性や関係性を説明できないと批判する。そして女性ケアラーのケアの根拠を道徳的判断ではなく、判断の個別性や関係性に求めた。

## 2-3 感覚的活動の特徴——ケアの個別性と関係性

感覚的活動の特徴を整理する。それは第1に、感覚的活動をいかに行うか、行いうるかはアクターの相互行為、すなわちケア関係における個別性や関係性に規定されるとする点である。本稿はこの点に感覚的活動の独自性を見る。メイソンは、感覚的活動には多くのバリエーションがあり、それは複数のケア関係に転用可能な「構造」としては説明できないとする (Mason 1996: 24)。何がケアとなりうるかは、アクターに依存するという意味においてケアは個別性があり、ケアニーズの理解や受け止め方・伝え方、その満たし方・満たされ方のパターンはアクターの相互行為に埋め込まれているという意味においてケアの関係性を指摘する。

感覚的活動をアクターの相互行為から概念化することを試みたのは、ジョアン・トロント

への批判からも明らかである。メイソンはトロントのケアの定義を、ケアに関わる個人あるいは集団の係に着眼した点を評価しているが、トロントが発見した4つのケアのプロセスはケアの類型化であり、ケアの係性を検証できないと批判する。特に「ケアの受領 (care-receiving)」という類型は、ケアの受け手を「ケアに尋常でないほど受動的」に規定していると批判する (Mason 1996: 22)。メイソンにとってケアの受け手とはケア行為の反応体ではない。子がケアラーより先にケアニーズに気づき空腹を伝えたり、「定刻」に調理が済む献立を提案したりと、ケアの受け手が係を築くこともある。子が食べない、つまりケア (の一部) を受領しないことで係の再構築を促すこともある。さらに言えば、メイソンはケア行為に受動的な受け手とのケア係が成り立つかどうかは、その係の個別性と係性に規定され、類型として規定できないことを射程に入れている。そして、同様の視点に立てば、トロントの「ケアの提供 (care-giving)」という類型も、能動的なケアの与え手のみを規定していると批判できる。

第2の特徴は、感覚的活動を行う必要条件を、ケアの与え手であることではなく、ケアへの気遣い (active sensitivity) とした点である (Mason 1996: 31)。ケアの与え手が受け手と時間や経験を共にしたとしても、そこでケアの手がかりやケアニーズを探知しようとアンテナを張っていなければ、感覚的活動の機会を逃し、適切な活動ができなくなる。そのように考えると、感覚的活動は母親というカテゴリーに属せざるものではない。逆に母親というカテゴリーに属さなくとも、ケアへの気遣いのあるアクターならば感覚的活動を交わすケア係を築きうるともいえる。

第3の特徴としては、感覚的活動は、そのケアが置かれた状況にも依存して変容することを主張する点である。ここでいう状況とは、ケアラーの時間的資源や経済的資源、健康といったケアに関わる主体の個人的なケア資源という含意と (平山 2018: 第9-10段落)、ケアラーが感覚的活動を行いたくとも長時間勤務が免れない社会構造や、ケアラーになるとことで経済的、時間的ハンデが生じ「二次的依存者」となる社会構造、食事を用意・調理するケアをケアワーカーに委託しにくい言説構造等、ケアに関わるマクロな状況を指す。

#### 2-4 感覚的活動の利点——ケア分担の困難を解きほぐす

感覚的活動の利点は、先行研究においてケア分担の困難とされてきたものを、ケアの個別性や係性と捉え直す点である。たとえば高山純子は、家事育児ケアの平等な分担を志向する同居夫婦であっても、夫と妻がケアに求める水準や、何をケアとするか、何をもちてケアの「完了」「達成」とするかに差異があることや、差異を言語で理解しあう困難を指摘する (高山 2020)。平尾桂子は「食事の用意」に関する夫婦間の認識の違いを指摘し、妻にとって主に「食事の用意」とは献立や食材、食器、調理法の選別などの感覚的活動を含むケアであるが、夫にとっては外食や調理済み食品を選別する感覚的活動や、出前の予約や温め作業を含んだ家事とみなされているケースもあり (平尾 2021: 58)、「食事の用意」への感覚的活動を共有するためには、ケアそのものへの認識の違いを埋める必要を示唆する。また、母親が父親に感覚的活動への関与を望みながらも行わない要因として、感覚的活動を言語化して伝える行為を時間や労力、リターンの面で「非効率」と認識することも確認されている (高山

2020)。感覚的活動はこうしたケア関係ごとの差異を理解する困難や言語で埋める困難を、感覚的活動の特質として捉えることができる。

## 2-5 感覚的活動の課題——感覚的活動を行うアクターの探知

このような感覚的活動という概念を今後のケア研究に用いる課題は何か。本稿では以下の2点を指摘する。第1の課題は、感覚的活動に関与しうるアクターの範囲を検証することである。メイソンは、家族や親族内に限定して同概念を導いたが、その具体的な範囲については定義していない。ケアラー以外のアクターは「others」とされ、それが血縁や婚姻関係で規定されるものなのか、同居・近居・別居といった居住空間で規定されるものなのか、ケアラーのケア責任の度合いで規定されるものなのか、養子関係やパートナーとの関係などが範疇に入るのか定かではない<sup>4</sup>。また「others」の線引きはケアラーのケアの気遣いの有無で指定されると解し、アクターを家族や親族内に限定せず感覚的活動を論じる余地もある<sup>5</sup>。

第2の課題は、感覚的活動が交わされるケア関係を受け手と与え手のダイアドに閉じることなく検証することである。メイソンは、感覚的活動とは自身と自身以外のアクターたちとの関係（relationships between oneself and others）あるいは、自身とアクターたちの関係（relationships between others）について感知・思案する活動と記しており（Mason 1996: 27）、「oneself」を受け手、「others」を与え手とは規定していない。また、メイソンの感覚的活動は「others」という複数のアクターに向けられている。メイソンが感覚的活動をひとりの主体に向けるものと解していれば「the other one」と記すところだが、そのような表記はない。以上に鑑みれば、感覚的活動の与え手を家族・親族内の女性ケアラーに固定することなく、また感覚的活動に能動的なアクターに固定することなく詳述する研究が望まれる。

## 3 感覚的活動と諸概念の配置

### 3-1 感覚的活動と諸概念の配置

本章では感覚的活動と「感情労働」「名もなき家事」「家事のマネジメント」「心的労働」「認識労働」といった諸概念との差異を確認する。これらの概念は、物理的ケア作業を支える認知レベルの活動に着目し、主に女性ケアラーの負担や責任を明示化した点で視座を共にする。また、諸概念が想定するケアの受け手は「依存的他者」に限られておらず、ケアニーズとは与え手が判断する外挿的ニーズであり、ケア行為とは受け手に「良かれと思って」行われる志向性のある行為が想定されている。以上の点ではケア概念を共にする。他方、感覚的活動はケアの個別性や関係性を主張する点で諸概念と比較し独自の視座を持つ。

まず「感情労働」とは、ケアの与え手が、ケアが求められる状況において、状況に適した表情や振る舞いを見せられるよう、自身の感情を管理することである（Hochschild 1983）。この概念のもとでは、ケアの与え手の私的な感情と、ケアの与え手としてあるべき感情とが想定されている。そしてケアの与え手は、ケアが前者に左右されないよう配慮し、前者と後者に齟齬がある場合は、前者を抑制したり感情を操作するとされる。この概念は、ケアの与え手が私的な感情を抑制するストレスや、私的な感情の喪失感などがケアの負担となることを

明らかにする効果がある。それに対し感覚的活動とは、感情労働の前に、あるべきケア、できるケアを察する活動であり、適切な表情を考える活動が感覚的活動にあたる。また、感情労働では「食事の配膳中は笑顔が良い」といった特定の状況におけるケアの典型が想定されているが、感覚的活動は典型を措定しない。感情労働はそれを支える無限の感覚的活動に依存して変動すると解す。

また、近年浮上した「名もなき家事」という概念は、その一部に感覚的活動を内包する概念である。「名もなき家事とは」、食事の用意を例に取れば、箸のペアを探す、調味料を詰め替える、デリバリーの注文を出すといった、家事として必ずしも意識されてこなかった目に見える物理的ケア作業と、献立や調理の段取り、食事の時間帯、子どもに嫌いなものを食べさせる方法を考えると目に見えない認知的な活動とを指す概念で、後者の活動が感覚的活動と同義である。この概念は、ケアの与え手の時間や労力を要する行為であるにもかかわらず「名もなき家事」であった物理的ケア作業に名を与え、その家事の実態やケアの与え手の負担を精査する効果がある。また、女性ケアラーがより広範な「名もなき家事」を認知し、物理的ケア作業を行っている/行ってしまうジェンダー非対称性を示す点でも有用である。しかしながら、この概念は、ケアの個別性や関係性に目を向けたメイソンとは射程が異なる。感覚的活動概念を「名もなき家事」に援用するならば、個別のケア関係のもとの、いかにしてどのような「名もなき家事」がケアとなるのか/ならないのか、という問いを立てることが可能となろう。

また「家事のマネジメント」とは、いつ誰がどの家事をどのように行うか「記憶し、計画し、段取り・調整すること」とされ (Hochschild 1989: 276)、物理的ケア作業との異質の活動や作業を示す概念である (Coltrane 1996; Allen and Hawkins 1999)。近年は、感覚的活動の中の特に思案を物理的ケア作業へと具現化する感覚的活動を指す論者と (平山 2017; 高山 2020)、計画・段取り・調整を目的とする物理的ケア作業を指す論者がおり (藤田 2010)、前者の研究は、家族の食事を用意・調理するケアに「家事のマネジメント」に該当する様々な感覚的活動が含まれていることを明らかにした (平山 2017: 42-4)。たとえば、母親ケアラーが、家族成員各々のケアニーズを汲み取り献立を考え (大人向けのコレステロール値を下げる食事と、子どもの脳の発育に必要なコレステロールを摂取する食事をどのように実現すべきか考える等)、計画を立て (上の子にとっては早く、下の子にとっては遅い夕食の時間を考える等)、物理的ケア作業の段取りを決めなければ、ケアが成り立たないことを示す。同時に、この概念は、夫婦間では女性ケアラーが「家事のマネジメント」の責任と遂行を担っていることを明らかにした。女性ケアラーは、家族にとって望ましい食事の基準を作り (Mederer 1993)、男性ケアラーが物理的ケア作業を行う際には、作業を適切に行うようリマインドするなどして作業の過程を管理し (Ahn, Haines, and Mason 2017)、ケアワーカーを利用する場合も、作業を監督する感覚的活動を行い (Gregson and Lowe 1994)、家事のマネジメントの結果に強い責任を感じていた (Daly K. 2001)。また、「家事のマネジメント」が女性に偏る一因として、感覚や思考がアクター間で共有しにくい性質であることや、共有する手間や共有後の家事効率を、女性ケアラーが非効率と認識することも明らかにした (高山 2020)。後者の視



角のもとでも、女性ケアラーが家事のマネジメントに該当する物理的ケア作業を、時間や頻度面で多く担っていることが確認されている。たとえば、子どもの託児先について情報収集し、連絡を取り、託児日時を決める作業を女性ケアラーがより多く行っていることを明らかにした (Deutsh 1999)。

また、感覚的活動の一部を「心的労働 (mental labor)」と定義し、そのような活動を時間で測定することを試みた研究がある。心的労働はケアの与え手が「家事作業 (household task) を行っていない時に、家事労働について考えること」 (Lee and Waite 2005: 332)、あるいは「家事 (work) や家族成員に関係する様々な思考」と定義される (Offer and Schneider 2011: 816)。そしてどちらの定義に依拠するにせよ、米国においては女性ケアラーが男性ケアラーより長時間を心的労働に費やしているとされる。これらの定義は、ケアの与え手が意識していない感覚的活動や、家事作業と同時並行的に行う感覚的活動を概念に含まない点でメイソンとは射程が異なる。

### 3-2 感覚的活動と認識労働の配置

感覚的活動の一部を実証研究した近年の注目すべきケア研究に、アリソン・デミンガーの「認識労働」研究がある。デミンガーは感覚的活動の個別性や関係性を踏まえたうえで、ケアラーが家族のケアニーズに応える際の感覚的活動に着目し、その活動を4つの過程に分節化される「認識労働 (cognitive labor)」とした (Daminger 2019) <sup>6</sup>。本稿は、感覚的活動の一部を活動の頻度、緻密さ、種別から検証したデミンガーの手法を、母親が家族の食事を用意・調理するケアの分析に活かすことが有用と判断し、以下で同研究について詳述する。

まず、調査の概要を説明する。調査の対象は、米国ボストン在住の (白人 80 %、アジア系 10 %)、高学歴 (男性 70 %、女性 92 %が大学院卒、右記以外は皆大卒)、高階層 (平均収入男性 105,000 米ドル、女性 70,000 米ドル)、フルタイム就労者である未就学児 (平均年齢 2.7 歳、平均人数 1.4 人) の子育て夫婦という、夫婦共にきわめて豊富な資源を均等に保持するケアラーである。そのうえ、対象者はジェンダー平等意識を持ち、物理的ケア作業を平等に分担している (と認識している) 夫婦に限定されている。対象者へのインタビュー事項は、物理的ケア作業を行う前の「判断」である。食事を用意・調理するケアについては、献立を決める労働、子どもの食事の時間帯を決める労働、食材や日用品を把握する労働、買い出しが必要なものを見つける労働について聴取している。特筆したいのは、デミンガーが聴取を試みたのは、判断内容の夫婦のずれやコンフリクトではなく、判断する頻度や判断内容の緻密さとしたことである。デミンガーは、感覚的活動はアクターの個別のケア関係ごとに異なるため、判断内容が夫婦でずれて当然との前提に立つ。そのうえで、夫婦が認識労働を「共有 (shared)」することを、夫婦が互いの判断内容の溝を埋め理解しあうことでも共に判断を行うことではなく、あるケアニーズに対し同程度の頻度や緻密さで感覚的活動を行うこととしている。たとえば、夫婦が同程度の頻度や緻密さで食事の献立について考えていれば「共有」、母親に偏っていれば「母親優位」と考察している。このような操作化は、感覚的活動を複数のアクターが理解しあい一緒に行う困難や、その状況を調査する困難を迂回するものであり、今後のケア研究にも有用な調査設計と思われる。

調査の結果、ケアラーの認識労働は「ニーズの予期 (anticipating needs)」という活動に始まり、「ニーズを満たす選択肢の識別 (identifying options)」「決断 (making decisions)」「ケアの進展のモニタリング (monitoring progress)」という活動へ移行する労働と定式した。そして、認識労働は資源やジェンダー意識上は「二次的依存」状況にない母親ケアラーであっても、父親ケアラーよりも多くの認識労働を行っていること、時間的にも心理的にも負担の多い「ニーズの予期」と「ケアの進展のモニタリング」という活動は、特に母親に偏っていることを指摘した。父親ケアラーが少なからず関与していた「ニーズを満たす選択肢の識別」や「決断」という活動は、単発的で、時間的拘束の少ない活動であり、母親ケアラーが常時子どものケアへの気遣いをし、「ニーズの予期」や「ケアの進展のモニタリング」を行い、そこでの気づきを父親ケアラーに伝えなければ成り立たない活動であった。

### 3-3 感覚的活動と認識労働の相異

本章の最後に、認識労働と感覚的活動との相異を確認する。まず両概念の共通性についてである。認識労働は、感覚的活動の中のケアニーズに関する一部の思考を概念化したものであり、感覚的活動の下位概念に当たる。認識労働は、ケア関係の数に呼応して際限なく拡張しうる感覚的活動の一部を、認識労働の頻度、緻密さ、種別という分析軸で実証し、女性ケアラーに偏るとされる感覚的活動のあり方を、ケア関係をとるまく資源構造が豊富で均質な夫婦間でも実証したものである。

両概念の差異は、第1に、認識労働は予期→選択肢の識別→決断→モニタリングという4種類の過程を踏むケアニーズについての感覚的活動のみに着目したものであり、このような過程を踏まない感覚的活動や、4類型に該当しない感覚的活動については分析対象としていない点である。認識労働は、資源の豊富な夫婦ケアラーの感覚的活動の共通性に着目して導かれた概念であるからか、ケアニーズを思考する過程がきわめて合理的、効率的、理想的に一方方向へと定式化されている。他方で感覚的活動は、個別のケア関係ごとのケアニーズの思考過程の異なりに着目するものである。今後のケア研究の進め方としては、認識労働の分析手法を4類型以外の感覚的活動の分析や、ケアニーズに対して異なる過程を踏む感覚的活動の分析へ応用することや、階層や資源構造、言説構造が同質な複数のケア関係における感覚的活動の異相を記述することとも思われる。

第2の差異は、認識労働が指定するケアニーズの帰属先は依存的他者としての子どもであるが、感覚的活動は依存的他者ではない主体をも帰属先とする点である。デミンガーは、ケアニーズの帰属先を健康な夫と子どもを含む家族としているようだが、実際に調査で聴取した(論文に記載した)ケアニーズは、依存的他者としての子どものケアニーズである。夫からの食事のリクエストといった夫の声は聞かれない。米国の家庭においては、母親は親役割より妻役割を優先するため、食事を用意・調理する際には子どもより父親のニーズを優先して認識労働する様子が確認されている(Devault 1991)。また、親役割を優先する「子ども中心主義」の日本の母親であっても、食事を用意・調理する際には夫のニーズを少なからず考慮したうえでケアが行われている(藤田・額賀 2021: 72-73)。ケアの受け手となる家族成員が複数いる場合、母親ケアラーが関わるケア関係も複数となる。それらの関係ごとのケアニ-

ズの思考過程の差異や、複数人のケアニーズを女性ケアラーが満たす際の認識労働のあり方は、今後の研究によって明らかにされるべきことである。

第3の差異は、認識労働のケアニーズは、夫婦間、父親/母親と子間、あるいは家族成員皆による相互行為を踏まえてケアラーが判断したニーズというよりも、父母ケアラーが依存的他者としての受動的な子どもに指定したケアニーズである点だ。認識労働は、受け手が平均年齢2.7歳でケアに受け身な状況において成り立っているが、そうではない受け手にケアニーズの4類型が同様に成り立つかは検討の余地がある。日本の母親が家族の食事を用意・調理するケアは、子どもの年齢が上がり母親への「依存度」が下がるにつれて、ケアの負担が増える。子どもの食事量は増え、孤食や嗜好への物理的ケア作業と感覚的活動の負担が増し、母親の食というケアへの意義づけが大きくなる(品田2017)。また、夫(父親)は年齢が上がると外食や中食の機会が減り、母親が用意・調理する食事への「依存度」が上がる。認識労働の枠組がケアニーズの帰属先の成長の変化にどの程度対応するかは、さらなる研究が求められる。

第4の差異は、認識労働は、ケアの場を同居する核家族に限定し、母親ケアラーと子、あるいは父親ケアラーと子のダイアド関係における感覚的活動について論じる点である。感覚的活動は、ケアラーをケアへの気遣いのあるアクターに拡張してとらえ、ケア関係をケアラーとケアの受け手とダイアド関係だけではなく、ケアラーと複数のケアの受け手や与え手との多層的なケア関係をみるための枠組でもある。認識労働の分析軸を複数のダイアド関係と繋がるケアラーの感覚的活動の分析に適用し、ケアラーが行うより広義の感覚的活動を捉えていくことも有用である。

## 4 結論と課題

### 4-1 結論

本稿はケアへの感知や思案を「感覚的活動」とするメイソンの概念に着目した。そして、諸概念との比較を通じ、同概念の特徴をケアの相互行為の個別性と関係性を主張する点とした。また、日本の母親ケアラーが家族の食事を用意・調理するケアを分析対象とした場合の同概念の利点を、ケア分担の困難とされてきたケア関係間の差異を、感覚的活動の特質としてとらえ直す点にみた。また、同概念の課題として、感覚的活動を行う多様なアクターの範囲と関与のあり方を探知する必要性を指摘した。感覚的活動の与え手を家族・親族内の女性ケアラーに固定することなく、また能動的な女性ケアラーに固定することなく、与え手と受け手のダイアドに閉じることなく検証することで、女性ケアラーに閉じてきたケア労働に対して新たな分析枠組を構築する必要性を確認した。そして、検証する際には、感覚的活動の下位概念にあたる認識労働の分析枠組を参考に、複数のアクターが認識労働の4類型やそれに該当しない感覚的活動へどのように関わりうるか、ケアの与え手が複数のダイアド関係あるいは多様な受け手と繋がることによる感覚的活動とはいかなるものか実証することを課題に据えた。

## 4-2 課題——感覚的活動のアクターと関与の検証

本稿の結論に基づく研究課題としては、どのようなアクターたちが、どのような感覚的活動に、どのように関与しうるか、またそのことで女性ケアラーの感覚的活動は、活動の対象や種別、頻度や緻密さ、責任においてどのように変容するかといった、アクターの範囲と関与のあり方の検証である。

アクターの範囲については、ケアの個別性や関係性、そしてケアへの気遣いが保障されたケア関係のアクターが誰か実証していく必要があるだろう。アクターたちが関与しうる感覚的活動については、デミンガーの認識労働の知見も有用である。子どもをケアニーズの帰属先とした場合、「ケアニーズを満たす選択肢の識別」や「決断」という活動は父親ケアラーの関与も確認されたが、ケアニーズを予期しモニタリングするような活動や、山根が指摘する子どもの健康状態・栄養状態といったケアの手がかりを把握する活動のように（山根 2018）、母親ケアラーから委譲されない活動もあり、関与が可能な活動については精査が求められる。アクターたちがどのように関与しうるかについては、少なくとも3つの方途がある。第1には、女性ケアラーが自身以外のアクターと共に感覚的活動の過程を踏むことを関与とみなし、女性ケアラーの責任が分有されるケア関係を論じる方途である（山根 2019）。第2には、デミンガーのように、アクターたちが個別のケア関係において、頻度や緻密さ種別の面で同等に感覚的活動を行うことを関与とみなし、その公平な分担を模索する方途である。第3には、ケアラーがケア関係を築くこと自体を支えることを関与とみなし、ケアの帰結や責任、二次的依存者としてのケアラーの保障を論じる方途である（平山 2019）<sup>7</sup>。これらの方途を検証することで、女性ケアラーのケア労働について新たな知見が開かれよう。

## 注

- 1 本稿は、母親ケアラーの世帯内における感覚的活動を検証する目的から、同居家族のいない母親ケアラーや、母親ではない女性ケアラーを射程外とするが、この区分は射程外とするケアラーの存在や感覚的活動の責任を否定するものではない。
- 2 ただし、ケアの対象を依存的な存在に限定する定義は、介護、介助、育児を「できれば避けたい」「強いケア」ととらえ、その社会的配分を志向する際には有用である（稲葉 2013: 227）。
- 3 本稿は日本の女性ケアラーは家族の食事の用意・調理というケアに母役割を見出すとの先行研究を踏まえ（藤田・額賀 2021）、家族の食へのケアに向き合う女性ケアラーを母親ケアラーと論じたが、女性ケアラーが夫のケアニーズに妻として関わるか、父親のケアニーズに母親として関わるかについては検証の余地がある。
- 4 介護分野では、単身要介護者への調整型ケアのように、ケアラーが不在のケアの受け手にケアワーカーが感覚的活動を行うケアも存在する。子どもへの調整型ケアの関係性についても検証すべきである。
- 5 女性ケアラーとケアワーカーの感覚的活動の対象や内容の違いについては、山根が議論を始めている（山根 2019）。
- 6 cognitive labor は「認知的労働」とも訳されるが、デミンガーはこの概念によって、ケアの与え手がケアニーズを認知する段階以上に、満たすべきケアニーズを峻別し、満たし方を識別し決断するといった能動的な活動を明らかにしているため、本稿は「認識活動」と訳す。
- 7 平山は結果の責任の分有について論じるが、結果が生じた新たなケアニーズを分有する方途も検討の余地がある。

## 文献

- Ahn, J. N., E. L. Haines and M. F. Mason, 2017, “Gender Stereotypes and the Coordinations of Mnemonic Work within Heterosexual Couples: Romantic Partners Manage Their Daily To-Dos,” *Sex Roles*, 77(7-8): 1–18.
- Allen, S. M., and A. J. Hawkins, 1999, “Maternal Gatekeeping: Mothers’ Beliefs and Behaviors That Inhibit Greater Father Involvement in Family Work,” *Journal of Marriage and Family*, 61(1): 199–212.
- Allison, A., 1991, “Japanese Mothers and Obentos,” *Anthropological Quarterly*, 64(4): 195–208.
- Began, B., G.E. Chapman, A. D’ Sylva and B.R. Basset, 2008, “It’s Just Easier for Me to Do It’ Renationalizing the Family Division of Foodwork,” *Sociology*, 42(4): 653–71.
- Coltrane, S. R., 1989, “Household labor and the routine production of gender,” *Social Problems*, 36(5): 473–90.
- Daly, M. ed., 2001, *Care Work: The Quest for Security*, Genova: International Labour Office.
- Daly, K. J., 2001, “Controlling Time in Families: Patterns That Sustain Gendered Work in the Home,” K.J. Daly ed., *Minding the Time in Family Experience, Vol.3, Emerging Perspectives and Issues*, New York: JAI, 227–49.
- Daminger, A., 2019a, “The Cognitive Dimension of Household Labor,” *American Sociological Review*, 84(4): 609–33.
- , 2019b, “How Couples Share “Cognitive Labor” and Why it Matters”, *Behavioral Scientist*, (Retrieved February 28, 2022, <https://behavioralscientist.org/how-couples-share-cognitive-labor-and-why-it-matters/?fbclid=IwAR0zVwK5rU1JounytmcPchevOTM8yKhVeaUIsR-A-ETTws6jGMhcdffLXg>).
- DeVault, M. L., 1991, *Feeding the Family: The Social Organization of Caring as Gendered Work*, London: University of Chicago Press.
- Finch, J. and J. Mason, 1993, *Negotiating Family Responsibilities*, London: Routledge.
- Folber, N., 2001, “Accounting for care in the United States,” Daly, M. ed. *Care Work: The Quest for Security*, Genova: International Labour Office, 175–92.
- 藤田喜代子, 2010, 「家事労働再考——マネジメントの視点を中心に」『女性学年報』31: 1–31.
- 藤田結子・額賀美沙子, 2021, 「家庭における食事の用意をめぐる意味づけ」『社会学評論』72(2): 151–68.
- Gerstel, N. and S. K. Gallagher, 2001, “Men’s Caregiving: Gender and the Contingent Character of Care,” *Gender and Society*, 15(2): 197–217.
- Gilligan, C., 1982, *In a Different Voice: Psychological Theory and Woman’s Development*, Cambridge: Harvard University Press. (岩男寿美子監訳, 1986, 『もうひとつの声——男女道徳観のちがいと女性のアイデンティティ』川島書店.)
- Graham, H., 1983, “Caring a Labour of Love,” Finch, J., and Groves, D., eds., *A Labour of Love:*

- Women, Work and Caring*, London: Routledge, 13–30.
- Gregson, N. and M. Lowe, 1994, “Waged Domestic Labour and the Renegotiation of the Domestic Division of Labour within Dual Career Households,” *Sociology*, 28(1): 55–78.
- 畠山洋輔, 2016, 「手抜き化は進行しているのか」品田知美編『平成の家族と食』晶文社, 78–84.
- 平尾桂子, 2021, 「家事の外部化——サービス利用の規定要因と家事頻度との関連」『第4回全国家族調査(NFRJ18)第2次報告書』: 40–61, 日本家族社会学会ホームページ, (2021年12月1日取得, <https://nfrj.org/nfrj18publishing.htm>).
- 平山亮, 2017, 『介護する息子たち——男性性の死角とケアのジェンダー分析』勁草書房.
- , 2018, 「『名もなき家事』の, その先へ——“気づき・思案し・調整する”労働のジェンダー不均衡 vol.03 SA には『先立つもの』が要る——『お気持ち』『お人柄』で語られるケアが覆い隠すこと」, 勁草書房編集部ホームページ, (2021年8月25日取得, <https://keisobiblio.com/2018/02/19/namonakikaji03/>).
- , 2019, 「『名もなき家事』の, その先へ——“気づき・思案し・調整する”労働のジェンダー不均衡 vol.08 Sentient activity は(どのように)分けられるか——構造、自己、信頼の3題」, 勁草書房編集部ホームページ, (2021年8月25日取得, <https://keisobiblio.com/2019/05/30/namonakikaji08/>).
- Hochschild, A. R., 1983, *The Managed Heart: Commercialization of Human Feeling*, Berkeley, CA: University of California Press.
- Hochschild, A. R., and A. Machung, 1989, *The Second Shift: Working Families and the Revolution at Home*, New York: Penguin.
- 稲葉昭英, 2013, 「インフォーマルなケアの構造」庄司洋子編『シリーズ福祉社会学4——親密性の福祉社会学』東京大学出版会, 227–44.
- 一般社団法人日本小児アレルギー学会, 2016, 『食物アレルギー診療ガイドライン2016』協和企画.
- ISSP Research Group, 2014, “International Social Survey Programme: Family and Changing Gender Roles IV- ISSP 2012 GESIS Data Archive,” (Retrieved February 28, 2022, [https://search.gesis.org/research\\_data/ZA5900](https://search.gesis.org/research_data/ZA5900))
- Jenkins, M. and N. Gerstel, 2020, “Work and Family in the Second Decade of the 21st Century,” *Journal of Marriage and Family*, 82: 420–53.
- 公益社団法人母子衛生研究会, 2021, 『母子健康手帳副読本——赤ちゃん&子育てインフォ』公益社団法人母子衛生研究会.
- 厚生労働省, 2018, 『保育所保育指針解説』フレーベル館.
- Lee, Y. S. and L. J. Waite, 2005, “Husbands’ and Wives’ Time Spent on Housework: A Comparison of Measures,” *Journal of Marriage and Family*, 67(2): 328–36.
- Mason, J., 1996, “Gender Care and Sensibility in Family and Kin Relationships,” J. Holland et al. eds., *Sex, Sensibility and the Gendered Body*, London: Macmillan, 15–36.

- Mayeroff, M., 1971, *On caring, New York: Harper and Row*, (田村真・向野宣之訳, 1987, 『ケアの本質——生きることの意味』 ゆみる出版.)
- Mederer, H. J., 1993, “Division of Labor in Two-Earner Homes: Task Accomplishment versus Household Management as Critical Variables in Perceptions about Family Work,” *Journal of Marriage and Family*, 55(1): 133–45.
- 永井恵子, 2016, 「我が国の家事外部化の動向を探る——家計調査結果から見た『家事に関する支出』」『季刊家計経済研究』 109: 24–35.
- NHK 放送文化研究所編, 2011, 『日本人の生活時間・2010——NHK 国民生活時間調査』 NHK 出版.
- 野村浩子, 2016, 「香港で外国人家事労働者を雇う日本人家庭の意識調査」『淑徳大学人文学部研究論集』 102: 71–78.
- Offer, S. and B. Schneider, 2011, “Revisiting the Gender Gap in Time-Use Patterns: Multitasking and Well-Being among Mothers and Fathers in Dual Earner Families,” *American Sociological Review*, 76(6): 809–33.
- 品田知美, 2017, 「朝夕食卓に全員がそろう核家族は2割以下に過ぎない——生活時間を取り戻す労働時間規制のあり方を探る」『女も男も』 129: 18–23.
- 総務省統計局, 2018, 『平成 28 年社会生活基本調査——全国・地域生活行動編』 日本統計協会.
- 多賀太, 2021, 「夫婦外への家事委託と家事負担感」『第 4 回全国家族調査 (NFRJ18) 第 2 次報告書』 27–39.
- 高山純子, 2020, 「子育て期の共働き家庭における家事分担の困難と家事のマネジメント」『家族研究年報』 45: 61–78.
- Tayah, M., and ILO, 2016, *Decent Work for Migrant Domestic Workers: Moving the Agenda Forward*, ILO ホームページ, (Retrieved February 28, 2022, [https://www.ilo.org/global/topics/labour-migration/publications/WCMS\\_535596/lang--en/index.htm](https://www.ilo.org/global/topics/labour-migration/publications/WCMS_535596/lang--en/index.htm)).
- 東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター, 2020, 「新型コロナウイルス感染症に伴う乳幼児の保育・生育環境の変化に関する緊急調査 (保護者調査と保育・幼児教育施設調査)」, 東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センターホームページ, (2021 年 8 月 25 日取得, <http://www.cedep.p.u-tokyo.ac.jp/projects-ongoing/covid-19study/>).
- 上野千鶴子, 2011, 『ケアの社会学』 太田出版.
- Ungerson, C., 1983, “Why do women care?” Janet, F., and Groves, D., eds., *A Labour of Love: Women, Work and Caring*, London: Routledge, 31–49.
- 牛窪恵, 2019, 「働く既婚女性の調理外部化に関する一考察」『立教ビジネスデザイン研究』 16: 1–14.
- 山根純佳, 2010, 『なぜ女性はケア労働をするのか——性別分業の再生産を超えて』 勁草書房.
- 山根純佳, 2018, 『「名もなき家事」の, その先へ——“気づき・思案し・調整する” 労働の

ジェンダー不均衡 vol.04 <感知・思案>の分有に向けて——『資源はどうして必要か』再考」, 勁草書房編集部ホームページ, (2021年8月25日取得, <https://keisobiblio.com/2018/03/27/namonakikaji04/>).

——, 2019, 「『名もなき家事』の, その先へ——“気づき・思案し・調整する”労働のジェンダー不均衡 vol.07 <感知・思案>の分有に向けて——ケアの『協働』の可能性」, 勁草書房編集部ホームページ, (2021年8月25日取得, <https://keisobiblio.com/2019/04/15/namonakikaji07/>).

(えじま ゆうか、東京大学大学院人文社会系研究科博士課程、[ejimayuka@hotmail.com](mailto:ejimayuka@hotmail.com))

(査読者 平山亮、藤田結子)

## **Constructing a research framework based on “sentient activity” among caring actors:**

Focusing on cases where mothers provide for the family

*EJIMA, Yuka*

This study examines “sentient activity”, a concept introduced by Jennifer Mason, which focuses on the invisible activities that espouse caring, including feeling and thinking. By comparing the concept with similar caring frameworks, this study found that sentient activity is developed and performed relationally and personally with specific people. We applied this concept to analyze how Japanese mothers provide for their families, and suggested that the sentient activity framework should reconceptualize the definition of providers to include actors other than the mother or the main female caregiver. Additionally, the framework should determine the actors based on the frequency of the sentient activity. The results obtained suggested that sentient activities can be undertaken in both one-to-one and one-to-many settings.